『唐人雜鈔』について

池田温

はじめに

東洋文庫の所藏する『唐人雜鈔』一卷は、すでに中國の饒宗頤・榮新江・陳國燦三氏の言及はあるものの、その全容は學界に周知されていない。全文六十餘行と墨抹數行のいたんだ殘卷ながら、中國文物に造詣の深い長尾雨山の「唐人襍鈔」の箱書があり、立派な錦繡の裝丁がほどこされていて、一見しかるべきあつかいを要す文物としられる。

本卷が文庫の收藏となった經緯については、『東洋文庫年報（二〇〇八年度）』2頁に「池田温研究員よりは、同氏保有のオリジナル敦煌文獻の寄贈を頂いた。當文庫には世界各地に保存されている敦煌文書のマイクロ・フィルムがあるが、これに

より現物をも保有する事となった。」とみえる。筆者は一九九〇年（平成二年）十一月十七日（土）に神田小川町の東京古書會館における東京古典會の〈古典籍下見展觀大入札會〉[1]を一見した際本卷に出會い、寫經とはことなるユニークな内容に留意し、身分不相應ではあったが入手をはかり、懇意な山本書店を通じて購收することができた。

近來年々老化がすすみあすをもしれぬ境遇となったので、多年お世話になった東洋文庫に寄贈させていただいた次第である。

一　題署者　長尾雨山

題署者略歷

一、長尾甲、字は子生、通稱槇太郎、雨山、石隱、无悶道人、睡道人などと號し、書齋を无悶室、何遠樓、思齊堂、艸聖堂、漢磚齋、夷白齋などと稱し、居を猗々園、蘆中亭、栝園などといった。

一、元治元年（一八六四）九月一八日、讃岐高松藩士・長尾柏四郎勝貞（號・竹嬾）の長子として高松で生まれた。幼時から父に從って漢學を修めた。

一、明治二一年（一八八八）東京帝國大學文科大學古典講習科を卒業。學習院教師。文部省專門學務局勤務。

一、同　二二年（一八八九）東京美術學校教授兼務。

一、同　三〇年（一八九七）第五高等學校教授。

一、同　三二年（一八九九）東京高等師範學校教授、東京帝國大學文科大學講師。
一、同　三六年（一九〇三）上海に移住、商務印書館に入り、編譯を主宰。
一、大正　三年（一九一四）歸朝し京都に寄寓。
一、同　八年（一九一九）平安書道會副會長に就任。終身その任にあった。
歸國してより没するまで講學、著述、揮毫に從い、詩文では偶社を主宰するほか、景社、藝文社に顧問となり、泰東書道院、日本南畫院、日本美術協會、大東文化協會などにも、參與した。
一、昭和一七年（一九四二）四月一日　京都市上京區西洞院丸太町上の寓居で病没。吉田神樂岡の神葬墓地に葬る。享年七十九。遺著に何遠樓詩文集、古今詩變、儒學本論、楚辭講義、聖教序講義、古詩源講義などあるが何れも未刊。（『中國書畫話』卷末）

長尾雨山『中國書畫話』（筑摩叢書27）より

長尾雨山の傳記について人名辭典の類をみると、最大規模の講談社『日本人名大辭典』（二〇〇一年十二月）一三四七頁に「明治―昭和時代前期の漢學者・書家」として8行記述があるが、前掲略歴を補う點は「編譯を主宰」が「教科書の編集」に變わったのと「没後に『中國書畫話』が刊行された」とあるのに止まる。文化人にくわしい朝日新聞社『現代日本朝日人物事典』一九九〇年には不載。遺著は多いが漢

文を主とするため未刊で講演筆録等の多い『中國書畫話』だけが殘されているようである。雨山に師事した神田喜一郎（一八九七―一九八四）の序文は優れているので、原文四頁を廿數行に節略し以下に掲げて參考に資そう。

雨山先生は、わたくしの先師内藤湖南先生と共に、中國書畫の造詣において殆ど他に比類を見ない第一の權威者であった。わたくしは雨山先生にも長らく師事してきたので、今日に在って兩先生を知ること必ずしも人後に落ちないつもりであるが、兩先生の中國書畫に對して持された態度には、一つの基本的な共通したものがあったように思う。それは中國人が幾千年の長い傳統を通じて、正しいもの・雅なものとしてきた、つまり正統的なものを、先生自らも正統的なものとして尊重せられ、その價値を深く體認自得せられていたことである。これは兩先生が中國の文化人とおなじ教養を身につけ、おなじ感覺を具え、しかもその最高レベルまで達せられていた結果にほかならない。……この書は一般的な講演の筆記であるだけに、實にわかり易い。極めて難かしい事柄を、これほどまでによくも平易明快に説かれたものと思うのであるが、これは先生のような碩學にして、始めて出來た藝當であると信ずる。内容の絶對に信頼すべきことは言うまでもない。……雨山先生のこと……わたくしの承知している二三の事實をしるしておこう。先生の東京帝國大學における同學には甲骨學を以て知られる林泰輔（一八五四―一九二二）、『史記會注考證』の大著を遺した瀧川龜太郎（一八八一―一九四五）の諸博士があった。先生は特に文學の研究に專念し、當時から天稟の詩才を謳われた。……また岡倉天心と肝膽相照し、明治廿二年には天心と共に東京美術學校の創立に盡力し、その教授となり、更に雜誌『國華』の發刊にも多く畫策せられた。その後、熊本の第五高等學校教授として同地に赴任し、夏目漱石と同僚であった。當時先生は漱石と親交を結ば

れ漱石も先生に漢詩の添削を乞うたという。……卅六年遠く上海に移住、同地の商務印書館に入って、編譯事業を主宰、革命前の中國初中等教科書の編纂は、專らその手に成った。大正三年の末に帰國、京都に居を卜し、爾來、昭和十七年四月に病沒せられるまで優游自適、專ら詩書三昧の生活をおくられた。京都時代に主として往來せられたのは、内藤湖南（一八六六―一九三四）・狩野直喜（一八六八―一九四七）・西村天囚（一八六五―一九二四）・鈴木豹軒（一八七八―一九六三）等の諸博士で、東京時代以來の舊友が多かった。……昭和卅九年十二月[2]

本殘卷には民國時代の中國人の題記や捺印はひとつも存しない。従ってこれに題署された雨山が見出して裝釘を加えたと察せられる。上海在住中の蓋然性が大きい。『唐人雜鈔』とはまことに適確な標題といえよう。多分書法から唐代のものと鑑し、内容に即し雜鈔と命名されたのである。

二　舊藏機關　財團法人藤井齊成會有鄰館

京都市左京區岡崎圓勝寺町四四に聳立する有鄰館は、中國の豐富多彩な文化財を收藏する著名な博物館である。創立者藤井善助（第四代、一八七二―一九四三）は近江商人の家系、大阪金巾製織、江商、山陽紡績などの創立に參與し役員に任じ、明治四一年衆議院議員（國民黨、三期）、中國古美術收集につとめ、大正十五年有鄰館を創設した。

收藏品の豪華圖録として『有鄰大觀』六册（一九二九、一九四二）と『篤敬三寶册』一册（以上大型版一九四二）、

『有鄰館精華』一冊（中型版一九七五）の三種がある。

『有鄰大觀』は四冊（天・地・玄・黄）が昭和四年九月刊行、二冊（宇・宙）が昭和十七年六月刊。殷周青銅器をはじめ石刻・玉器・佛像・璽印・書畫・文房具・陶瓷・漆器等夥しい精品が解説つきで集録され觀る者を堪能させる。第一冊には園田湖城（一八八六―一九六八）の篆題や土井晩翠（一八七一―一九五二）の「德不孤」の題書が掲げられ、清浦奎吾（一八五〇―一九四二）の「珠林玉淵」の書もみえ、藤井氏の交際範圍のひろがりをしのばせる。全六冊中には沈瑞麟（一八？―一九？）・王震（一九〇八―一九九三）・鄭孝胥（一八六〇―一九三八）のような中國人の揮毫も目に著く。

『篤敬三寶冊』は佛教關係の文化財圖録で卷首に大谷光暢（一九〇三―九三）の題があり、さらに長尾甲署の「篤敬三寶聚觀」の書を掲げるので、長尾雨山が有鄰館と密接な關係を有したことが明らかとなる。また寫經に「北魏佛名經卷　燉煌出土」（一五）、「唐草書經　吐魯番出土　行間ウィグール文、王晉卿（一八五一―一九三六）庚戌（一九一〇）十月十日跋」（一六）、「唐長慶三年（八三三）天皇梵摩經卷　燉煌出土、紙背西藏文經」（一七）等を收載。

『有鄰館精華』は比較的新しく佛像・青銅器・陶磁・書・繪畫・副葬品等計七十一點を收載し、カラー圖版七頁を含みB5版ながら優品のすばらしさに讀者は眼を見張るであろう。

唐代西域出土文書は53 54 55の三點だけだが、塔らしきものを描く墨畫、開元十年（七二二）の年紀ある西州收馬所状、〈北庭都護府印〉を捺した官文書片、いずれも貴重な史料である。本館收藏の官文書類については、藤枝晃（一九一一―九八）[3]の長行馬研究（『東洋史研究』十卷三號、一九四八）と（『墨美』No.60特集長行馬文書、一九五六）

および日比野丈夫（一九一四―二〇〇七）[4]の「蒲昌府文書研究」（『東方學報京都』三三、一九六三）が代表的成果。

右三種の圖録には『唐人雜鈔』は不登載であり、この殘卷が財團法人の登録財産ではなかった、すなわち價値にとぼしいハンパものとされていた事情をものがたる。これが學界の注目を引いたのは來訪した中國學者の記録に始まる。

三　言及・著録

1　饒宗頤

『唐人雜鈔』に最初に注目したのは現在香港に居住する碩學饒宗頤（字固庵、號選堂、一九一七年六月廣東省潮安生）[5]、一九五四年七月十八日に藤枝晃京大助教授の案内で有鄰館を參觀し、その日深夜から翌朝にかけて

藤井氏所藏敦煌殘卷簡目（何彦昇舊藏）

を作成し同年十月「京都藤井氏有鄰館藏敦煌殘卷紀略」寫定、『金匱論古綜合栞』第一期中[6]に收め公刊された。この簡目は書札類五件、牒状類廿三件、宗教類七件、歌讃類四件、雜類二件に分類配列され、「書札類（三）沙州旌節官帖　四行」とあるのがすなわち『唐人雜鈔』46～49行に該當する。この紀略には日本に散在する敦煌資料についてかなり詳しい紹介がなされているが、有鄰館で重視されたのは李木齋舊藏の『五更轉』小唱本で全容が圖版で載録されるに比し、『沙州旌節官帖』については解説なく、前部に鈔寫された賦や『莊子』『孟子』等についても一言もふれない。

2　榮新江

饒宗頤の右述言及に留意、歸義軍時代敦煌史の資料として研究を加えたのが榮新江（一九六〇―）である。かれは周知の如く北京大學歴史系教授で、現代中國の敦煌研究をリードしている逸材。論文「初期沙州歸義軍與唐中央朝廷之關係」（黄約瑟・劉健明合編『隋唐史論集』香港大學、一九九三年、一〇六―一一七頁、一九八六年四月初稿、一九九一年十月修訂）に、一九九〇年末日本に訪學した時見た有鄰館文書として沙州旌節官帖の寫眞（48行～巻末）を掲げ、「旌節：文德元年（八八八）十月十五日午時入沙州、押節大夫宋光庭、副使朔方押牙康元誠、上下廿人。十月十九日中館設後、廿日送。」と原文六行を引用する。ここに掲げられた寫眞は東京古典會の目録（一九九〇年）から取ったもので、注53に前掲饒宗頤論文に言及する。

ついで自著『海外敦煌吐魯番文獻知見録』江西人民出版社、（東方文化叢書）一九九六年十月、二三一頁、の第六章　日本收集品、第六節有鄰館（一九四―九九頁）に、「有鄰館藏敦煌文書を最初に全面的に紹介したのは饒宗頤先生だった。饒先生は一九五四年有鄰館を訪れまた「京都藤井氏有鄰館藏敦煌殘卷紀略」一文を撰し、實見した殘卷の内容を詳記するとともに、多くの文書に何彦昇・李盛鐸の捺印があり、何・李二家藏卷の來歴を考證し、前後流散の情況に及んだ。」とのべ、更に饒文には「殘卷簡目」もみえ、分類著録の實際を紹介する。さらに陳（國燦）目・施（萍婷）目[7]に第60號とする寫卷は「一種の類書であり、その後に雜寫六行あり」とし、前掲「旌節：文德元年……廿日送」中に現れる宋光庭はまさにP・二九一三〈張淮深墓誌銘〉中にみえる〝中使宋光庭〟であろう。この雜寫は以

前不明であった唐朝が沙州歸義軍節度使張淮深に旌節を授與した年代を確定し、歸義軍史上のいくつかの問題を解決した」と論じている。

更に榮新江『歸義軍史研究—唐宋時代敦煌歴史考索』（上海古籍出版社、一九九六年十一月、四二六頁）の第一章第一節〈歸義軍大事紀年〉に「光啓四年／文德元年戊申（八八八）……十月、唐朝遣中使宋光廷等入沙州、授張淮深歸義軍節度使旌節。（有鄰館藏文書）」（11頁）、第二節〈敦煌地區的改元與紀年〉に「筆者最近發現有鄰館文書中有關文德元年十月十五日授予張淮深歸義軍節度使旌節的唐朝押節使臣到達沙州的記載、推測文德年號當是先期到沙州報告授節消息的沙州使者傳來的。」（47頁）、第四章第三節〈張淮深與唐朝之關係〉にも「一九九〇年末、筆者在日本訪學時、在京都有鄰館所藏敦煌文書中見到一件文書的末尾有如下文字：「旌節：文德元年……十月十九日中館設後、廿日送。」」と右掲と同個所を引用し、「這段文字寫在一種類書的後面、大概出自歸義軍節度孔目官之類的人物之手、録以備忘。它清楚地告訴我們、唐朝授與張淮深節度使旌節、是遲至文德元年十月的事。按文德元年三月、僖宗去世、昭宗即位。派中使宋光庭親赴沙州、宣賜旌節、大概是昭宗登基後的新政之一。唯史籍失載、而《張淮深墓誌銘》所記年代又有訛誤、賴此文書得以明了這一歸義軍史上的重要事件。但宋光庭的到來也未能挽救張淮深的命運、不到兩年、淮深一門即死于兵變。」（191頁）と論ずる。そして注（54）には東京古典會の一九九〇年大入札會目録から「旌節文德元年云々」の圖版を轉載する（196頁）。かように『唐人雜鈔』の零細な〝旌節〟數行は、榮新江の研究を通じ唐末期の西邊歸義軍節度使の歴史を解明する貴重なデータを提供している。

3　陳國燦

陳國燦（一九三三―　湖北鄂城生）は武漢大學歴史系で唐長孺教授（一九一一―九四）の指導を受け、魏晉南北朝・隋唐史を専攻、多年『吐魯番出土文書』全十卷の編纂に盡力、現在武漢大學教授、『吐魯番文書総目』大著兩册を編刊。その（日本收藏卷）（二〇〇五年六月）附録に「京都藤井有鄰館藏文書」が含まれ六十點を著録する（595～602頁）。最後の60が『唐人雜鈔』に該當しその文は左のとおり（ヨコグミ簡體字使用）。

060　殘類書及雜寫

殘類書存40多行、其子目有〝樓〟、〝兄弟〟、〝張衡〟、〝莊子〟、〝孟子〟等、後有雜寫6行：〝旌節文德元年（888）十月十五日入沙州、押節大夫宋光庭、副使朔方押牙康元誠上下廿人、十月十九日中館設後、廿日送。〟

圖古典籍下見展目40頁。歸義軍史研究196頁。

文陳國燦1993、45頁。施萍婷1994、100頁。知見録198頁。歸義軍史研究、191頁。

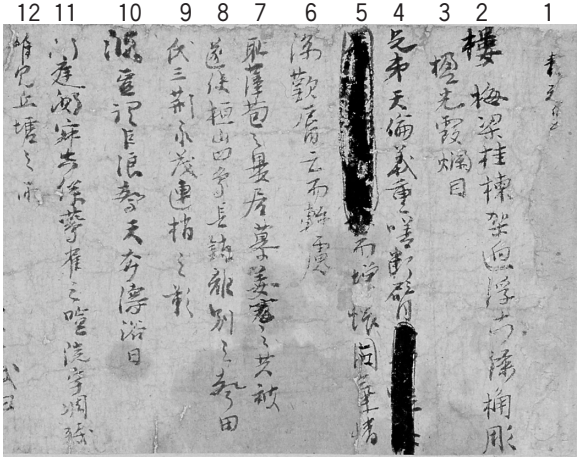
參饒宗頤1954。歸義軍史研究191、196頁（以上）

右にみえる饒宗頤は本稿三(1)、歸義軍史研究は本稿三(2)參照。陳國燦・施萍婷は本稿注(7)に言及。

陳國燦は榮新江の研究により本文書が敦煌のものと認識しているが、有鄰館には吐魯番文書が多いので、便宜的に附録としてのせたとことわっている。

以上が筆者の現在知る『唐人雜鈔』にかかわる記述である。不備が多いと懸念されるので、お氣付きの點を示教たまわれば有難い。

四　原文移録[8]



（首闕）
1　□□□
2　樓　梅梁桂棟架迥浮上繡桷彫
3　楹光霞爛目
（縫）
4　兄弟天倫義重嗟断臂□　□
5　□　□　弔增悵同氣情
6　深歎脣亡而軫慮
7　耻薛苞之聚居慕姜宏之共被
8　遂使桓山四鳥長□離別之聲田
9　氏三荊永茂連梢之影
10　瀛壹記巨浪驚天奔濤浴日
11　門庭閃寂出俟鸑雀之喧院宇凋殘
12　唯見丘塘之雨

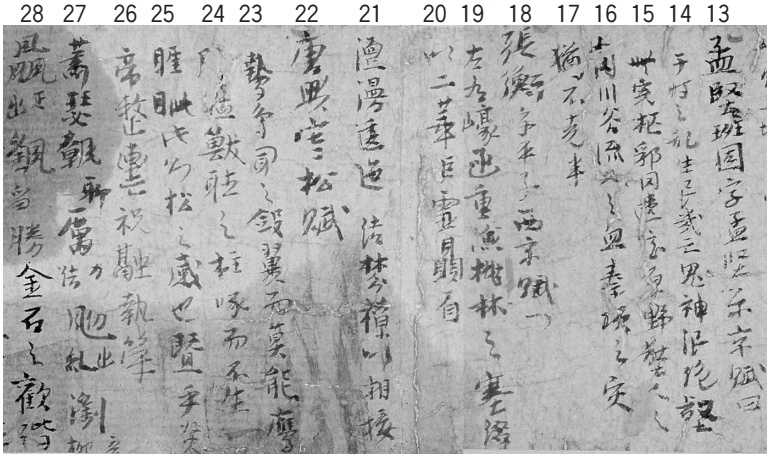
1行上3字存左半殘畫

4行下數字墨抹

5行上數字墨抹

8・9行故事　參照「孔子家語」

10行上2字行草體



13 孟堅班固字孟堅東京賦曰
14 于時之乱生尸幾亡鬼神泥絶壑
15 無完柩郛罔遺室原野厭人之
16 肉川谷流人之血秦項之災
17 猶不克半
18 張衡字平子西京賦曰
19 左有嶤函重險桃林之塞綴
20 以二華巨靈贔屭
21 澶漫逶迤　結棼橑以相接
22 唐興寒松賦
23 鷙鳥聞之鼓翼而莫能鷹
24 □猛獸聽之拄啄而不生
25 睚眦此則松之戚也曁乎炎
26 帝整畫祝融執策
27 蕭瑟風聊寮厲力佉颭止紇瀏音柳
28 風風正風出滔留勝金石之歓偕

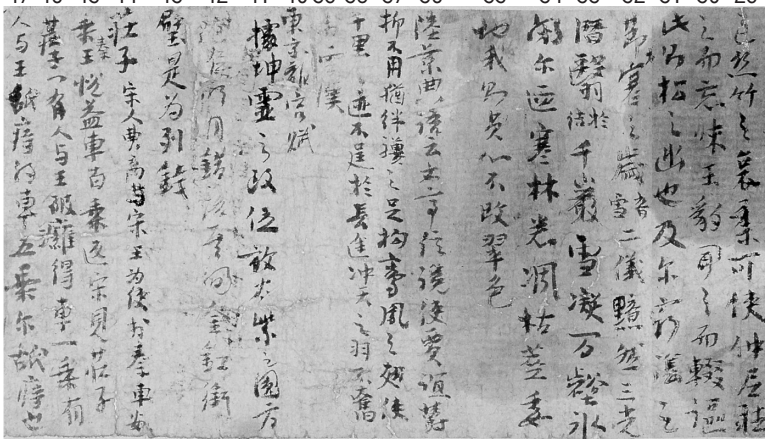
（縫）

一二

13～17行班固〈東〈都〉京賦〉抄録。李善注「文選」巻一収。尸・泥2字唐諱

18行～21行張衡〈西京賦〉抄録。李善注「文選」巻二収

22～35行〈唐興寒松賦〉、「文苑英華」賦百五十巻未収



29 已絲竹之哀柔可使仲尼聽
30 之而忘味王豹聞之而輟謳
31 此則松之出也及尔窮陰之
32 節大寒之歳（音雪）一儀黯然三光
33 潛翳（於侍）千巖雪凝万壑氷
34 閉尔迺寒林悉凋枯莖委
35 地我則負心不改翠色

（縫？）

36 ○陸景典語云文帝信讒使賈誼欝
37 抑不用猶伴驥之足拘鸞鳳之翅使
38 千里　迹不逞於長途冲天之羽不奮
39 高雲漢
40 東京離宮賦
41 據坤靈之政位放火柴之園方
42 □□明月□□其間金釭銜
43 璧是為列錢
44 莊子宋人曹商与宋王為使於秦車安
45 乘秦王悅益車百乘返宋見莊子
46 莊子曰有人与王破癰（壅）得車一乘有
47 人与王舐痔約車五乘尔舐痔也

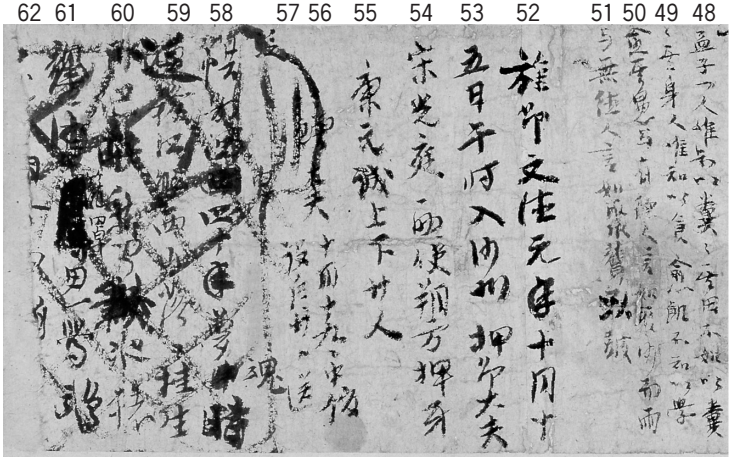
32行2大字、原右旁附記

36～39 陸景「典語」〈隋志〉十卷。嚴可均「四録堂稿輯本」未收

40～43〈東京離宮賦〉「文苑英華」賦百五十卷未收

41 42行背透見漢文三行

44～47「莊子」列御寇篇第卅二中第七項大約對應、但文辭異同不少



48 ○孟子曰人唯知以糞々□田不如以糞
49 々吾身人唯知以食愈飢不知以學
50 愈其愚与有聖人言如□□而帀
51 与無德人言如取承舊以跛
52 旌節文德元年十月十
53 五日午時入沙州　押節大夫
54 宋光庭　函使朔方押牙
55 康元誠上下廿人
56 押　大夫　十月十九日中館
57 設後廿日　送
58 帳　□□□四十年　夢　中　時
59 □　挂　生
60 □　□　□
61 □　□　籠　罩　田　一　□　□
62 □　□

（縫）

（縫）

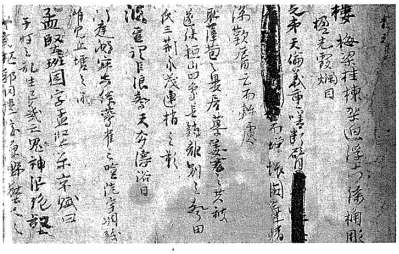
（尾闕）

48～51「孟子」檢索森本角藏「四書索引」1921年、孟子本文中不存同文、恐係抄録者拠記憶造

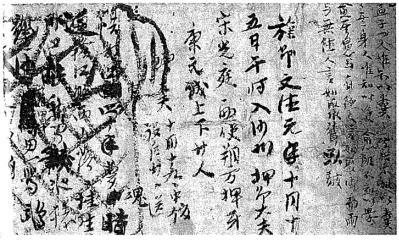
56行以下墨線抹消

注

（1）東京古典會の大入札會ではB5版の立派なカタログが作成され（目録八四頁、圖版五八七頁、カラー五五、單色五三二頁、全體で一二八一點をふくむ。本卷は1927番、）以下コピーを掲出して參考に供する。



1927 唐人雜抄 唐・文德元年寫 長尾雨山旨書



一卷

1918 榊太名勝八景 自筆花鳥図 日月百景 写真図五、三図模彩 奥秘宝蔵、栄西山、神西山、神西川、白鷺之峡、雷電峡、

第十三　中国古写経・刊本・写本類

1919 大般涅槃経 巻廿三 残巻 北魏時代写 巻首六枚 現存八枚 書体古雅

1920 誠実論経 巻第二 残巻 天平年代写 北魏時代 巻首十四 写真版三図掲載

1921 華厳経 巻第八 唐写 紀年明確な唐写経 巻首十四 写真版三図掲載 六十巻華厳の巻第八、第三品菩薩問品 巻首十四 写真版三図掲載 巻末に初題題字 巻首十四 写真版八図掲載 巻末に初題題字 巻首十四 写真版八図掲載 巻末に初題題字 巻首十四 写真版八

神田喜一郎の序、支那南畫について、書法講話、碑帖概論、文房瑣談の四部で構成、吉川幸次郎の解説、長尾正和のあとがきを附す。著者略歴は本書の編者令息正和編、卷末三七九頁。

神田序文1～4頁より抄録。なお吉川解説中には「乙亥（昭和十年）八月、雨山先生に圓山の左阿彌樓に侍飲し、是歳臘月追賦して事を紀し、即ち正斧を乞う」と題する自作の五言六四句の長詩とそれに唱和された雨山の「續演雅　和吉川善之見贈詩韻」を并載し、兩名の詩藻を傳える（三六七―七三頁）。

（3）藤枝晃の人と業績については『藤枝晃』（自然文化研究會發行、二〇〇〇年六月、三五九頁）追悼文集で寄稿は梅棹忠夫ほか計七七名のほか、石塚晴通・石塚恒子・礪波護・竺沙雅章・上山大峻五名による「藤枝晃を語る」座談會、藤枝晃著作目録一九三五―九九年、三七頁等を含む。

（4）日比野丈夫の人と業績については、『東方學』百三輯、二〇〇二年一月「座談會　學問の思い出―日比野丈夫博士を圍んで―梅原郁司會、日比野丈夫・神田信夫・竺沙雅章」一八三～二〇三頁、略年譜二〇四―五頁、主要著作目録二〇五―九頁。『東方學』百十五輯、二〇〇八年一月に梅原郁「日比野丈夫博士の想い出」、古賀登「日比野丈夫先生を偲んで」兩追悼文がある（二四八―五二頁）。

（5）饒宗頤は學問・藝術ともに超一流の人物で、日本・歐洲にも滞在したことがあり知友も少くない。昭和五五年八月には、新宿センタービル51階の朝日生命ギャラリーで〈選堂近作書畫展〉が開催された。香港中文大學中國文化研究所出版の『慶祝饒宗頤教授七十五歳論文集』（一九九三年、寄稿者三六名、日本人六名を含む、四六三頁）、曾憲通主編『饒宗頤學術研討會論文集』（香港翰墨軒出版有限公司出版、一九九七年、寄稿六十數名、五八〇頁）參照。著作も甚だ多く、著・編書數十册、『饒宗頤二十世紀學術文集』（臺北新文豐出版公司、全十四卷二十册、民國九二年（二〇〇三年）十月、新臺幣三萬二千元）にほぼ網羅。

（6）『金匱論古綜合栞（刊）』第一期はＢ４の大版、圖版を多く挿入し、徐亮之編輯、陳仁濤出版、香港亞洲石印局印行、香港統營公司總發行、一九五五年、一三二頁、定價港幣五十元。饒宗頤論文（選堂集林）七篇（五〇―一〇〇頁）收載し、その六番目が「京都藤井氏有鄰館藏敦煌殘卷紀略」（九六―一〇〇頁）。右「紀略」は饒宗頤『選堂集林史林』中華書局香港分局、一九八二年一月、下卷、九九八―一〇一〇頁、『饒宗頤二十世紀學術文集』11冊（卷八　敦煌學上）二〇〇三年、一九七―二〇九頁にも收録。ただ初出のヨコグミを後二者はタテグミに變え、初出の固有名詞傍線などをはぶき、他方その後の文獻等の追補はなく原文のままなので、初出によるのがよい。

（7）榮新江は『海外敦煌吐魯番文獻知見録』（江西人民出版社、一九九六年六月、（東方文化叢書）二三一頁）中に第六章　日本收集品の第六節　有鄰館　一九四―一九九頁が含まれ、そこに「一九九〇年九月十六日、京都大學礪波護先生に連絡をとり、藤枝晃・池田温兩專家に同伴され、武漢大學の陳國燦先生と私は若干時間有鄰館を訪れ、長行馬文書の一部分と其他いくつかの資料を實見した」と記し、なお敦煌研究院遺書研究所施萍婷所長が一九九一年三月十七日に有鄰館で調査し「日本公私收藏敦煌遺書敍録㈡」（『敦煌研究』一九九四年三期、九〇―一〇〇頁に報告し、陳國燦も「東訪吐魯番文書紀要㈠」（『魏晉南北朝隋唐史資料』第十二期、一九九三年、四〇―四五頁）に考察結果を報告しており、それぞれ相補うと説く（一九五頁）。

（8）原文についての解説は次號に掲載豫定である。

（東洋文庫研究員・東京大学名誉教授・創価大学名誉教授）